

預言者の苦しみと神の愛

ホセア書1章

行つて、淫行の妻と、淫行によつて生れた子らを受けいれよ。この国は主にそむいて、はなはだしい淫行をなしているからである。(2)

預言者ホセアが活動した時代はイザヤの時代と重なります。イザヤが南王国ユダにおいて活動していたのに対して、ホセアは北王国イスラエルにて活動しました。

それはヨアシの子ヤラベアムの治世で、イスラエル王国が非常に繁栄した時代でした。その一方で、物質的な繁栄は道徳的・宗教的な墮落をもたらしました。民らはバアル礼拝に傾き、恥ずべき淫乱な偶像礼拝に陥りました。そのような中、ホセアは主に命じられます。「行つて、淫行の妻と、淫行によつて生れた子らを受けいれよ」。神殿で娼婦として働く、ゴメルを妻として迎えるようにというのです。これは神と契約の民イスラエルとの関係を表すものでした。主の花嫁であるはずのイスラエルは主を捨ててバアル神のもとに走り、淫行にふけていくというのです。ホセアは自らがそのような妻を迎え入れることによつて、主がイスラエルの罪に対してどれほど心を痛めておられるかを身をもつて知ることになりました。主の悩みと苦しみは、イスラエルに対する変わることはない愛から生まれるものだったので。

主の真実な愛は、このわたしたちに対しても注がれています。わたしたちが主の民とされ、いながら神ならぬ存在に心を寄せるとき、主は激しくその心を痛めておられます。そして「わたしのもとに帰つてきなさい」と熱心に呼びかけておられるのです。